

## 日本語と中国語の文脈指示詞の対立型と融合型

— 談話モデルによる分析をもとに —

劉 巖

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻/日本学術振興会

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町/〒102-8472 東京都千代田区一番町8番地

**要旨** 本稿は談話モデル理論(東郷2000)を理論的な枠組みとし, 会話文における日本語と中国語の文脈指示的用法について検討した。談話モデル理論をそのまま採用せず, 文脈指示における対立型と融合型という2つのパターンに分けて考察を行った。その結果, 日本語と中国語の文脈指示的用法における共通点と相違点が判明した。

## 1. はじめに

日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」という三系列があり, その用法は多岐に分かれている。この三系列の指示形態素は単独で用いられないのに対して, 中国語の指示詞は「这(近称)・那(遠称)」という二項対立があり, 単独でも用いられる。コ・ソ・アと「这」「那」は様々な形で用いられ, コミュニケーションの中で対象を指し示すという指示機能を担い, 言葉の機能では大変に重要な働きをしている。本稿は, 会話における日本語と中国語のコ・ソ, 「这」「那」の文脈指示的用法を考察するとともに, その共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

## 2.1 日本語の文脈指示詞に関する先行研究

日本語指示詞に関する伝統的な研究では, 現場指示的用法を中心に扱われてきている。文脈指示的用法を扱ったものとして, 田窪・金水(1996), 東郷(2000)などが挙げられる。一方, これらはソとアの対立に関する問題を扱ったものであり, コとソの対立に関する問題は本格的に研究されていない。庵(2007)は, これまであまり扱われてこなかったコとソの対立に関する問題を積極的に

取り上げ, コとソの対立が「トピックとの関連性」と「テキスト的意味の付与」という話し手による先行詞の捉え方の違いによって使い分けられると指摘している。また, 日本語の文脈指示を扱った従来の研究では「文」を最大の単位とされてきているのに対し, 庵は文レベルの上位にあるテキスト・レベルから文脈指示に関する問題を扱っていることは評価できる。その一方, 庵(2007)では以下のような問題点が見られる。庵(2007: 93)によると, 「言い換え」, 「ラベル貼り」及び「遠距離照応」といった3タイプの文脈<sup>1)</sup>では, 「この」しか使えない。しかし, 劉(2011a)が指摘するように, この3つのタイプに完全に属する例文においても「その」が自然である。また, 劉(2011b)が指摘するように, テキスト的意味が付与されるか否かにも関わらず, 「その」のみならず, 「この」を持って指し示すこともできる例が数多く存在する。以上のことから, テキスト・レベルでの「先行詞-照応詞」という表層語形的な分析では文脈指示詞の問題をうまく説明できないということが分かる。また, 庵の例文の多くは新聞から採集されたもの(31例中24例が新聞からの例文)であるが, 劉(2011a)が示したように, 新聞やニュースのジャンルはコの領域であり, ソがほとんど使われていない<sup>2)</sup>。以上のことから, 文脈指示のコとソに関する問題は未だに解明されていないと考えられる。

## 2.2 中国語の文脈指示詞に関する先行研究

中国語の文脈指示詞「这」「那」に関する従来の研究は、概ね3つの段階を経て、現在に至っていると考えられる。初期の段階では、中国語指示詞「这」と「那」に関する史的研究が主流であった。その後の第二段階では、呂（1980, 1985）、朱（1982）などは構造主義言語学の観点から考察を行なっている。具体的には、呂（1980, 1985）はテキスト・レベルにおける「这」と「那」の用法を、「当前指（現場指示に相当する）」、「回指・前指（前方照応と後方照応に相当する）」及び「凭空指（架空の指示）」という3タイプに分けている。しかし、このような表層語形的な分析では、「这」と「那」の指示的用法をうまく説明できず、「凭空指」という用語自体にも問題があると考えられる。第三段階では、沈（1999）、胡（2006）、楊（2006, 2011）などが代表的な研究である。沈（1999）は「这」が無標であり、「那」が有標であるということを示している。胡（2006）は心理距離が実距離より重要であり、心理的に近ければ「这」が用いられるが、心理的に遠ければ「那」が用いられると指摘している。しかし、このような説明は主観的且つ曖昧であり、これでは「这」と「那」の文脈指示に関する選択問題をうまく説明できない。楊（2006, 2011）では、「这」は「一時的な記憶」に登録される対象を指し、「那」は「長期記憶」に登録される対象を指すと主張している。しかし、楊は「那」の観念指示的用法（日本語のア系指示詞に相当する）しか考察しておらず、その文脈指示的用法（日本語のソ系指示詞に相当する）を扱っていないと考えられる。劉（2010）は日本語の指示詞「ソ・ア」との対照を通して、「那」の文脈指示的用法と観念指示的用法は、それぞれ談話モデルの異なる領域に登録さ

れる対象<sup>3)</sup>を指し示すため、「那」の指示的用法を文脈指示と観念指示という2つの用法に分ける必要があると指摘している。なお、本稿では、「那」の文脈指示的用法のみ扱う。

## 3. 談話理論の導入

これまでの文やテキスト・レベル上の研究と異なり、談話理論を用いて文を越えた談話レベルでモデルを立て、指示表現に関する問題の解決を目指した研究として、Fauconnier（1985）、金水・田窪（1990）と東郷（2000）などが挙げられる。

Brown & Yule（1983）は話し手が情報を伝達するため如何に言語を使用し、聞き手はそれを解釈するため如何なる作業を行なうのかについて論じたものであり、話し手と聞き手による相互行為の重要性が強調されている。「文」ではなく「談話」における指示行為は、話し手だけではなく、聞き手がいて初めて行われる相互的な行為である。このため、様々な異なる談話の場を考慮に入れず、聞き手を排除して指示詞の機能を記述することはできない。しかし、Fauconnier（1994）のメンタル・スペース理論では聞き手があまり考慮されていない。田窪・金水（1996）の複数の心的領域による談話理論では聞き手が完全に排除され、指示詞の機能と用法を考察するには問題があると思われる。東郷（2000）の談話モデル理論はメンタル・スペース理論に立脚し、名詞句や代名詞などの意味解釈の問題を解決するために提案され、話し手と聞き手による相互性を重視した理論であるため、本稿では談話モデルを理論的な枠組とする。談話モデルは、下図のような基本形を成している（東郷 2002）。

談話モデルの共有知識領域には一般常識的な世

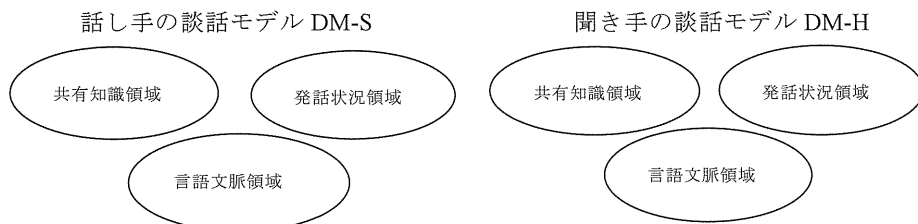


図1 話し手と聞き手の談話モデル

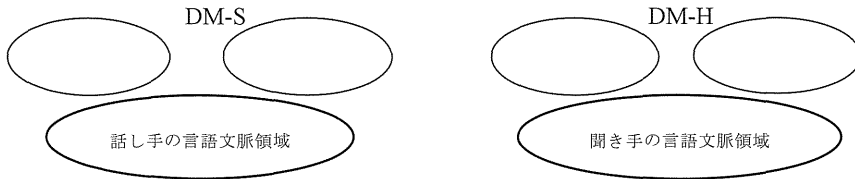


図2 対立型の談話モデル

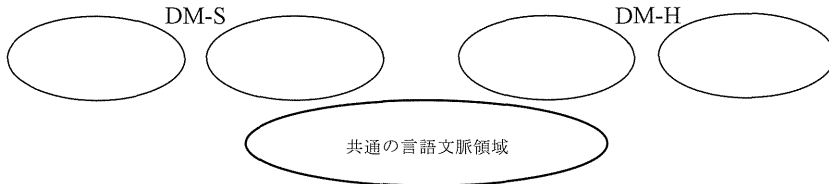


図3 融合型の談話モデル

界に関する知識及び話者個人の経験や知識に関する談話指示子 (discourse referent) が格納される。この領域では、一般に観念指示の「ア」と「那」が用いられる。また、発話状況領域は話し手と聞き手を含む発話の場であり、この場に存在する指示対象が全て発話状況領域に登録され、ここでは現場指示のコ・ソ・ア、「这・那」が用いられる。最後の言語文脈領域には、談話が始まる前には何も登録されず、話し手と聞き手による談話の展開につれて言語情報が入力され、累積されていく。この領域は主に文脈指示のコ・ソ、「这・那」の領域となる。

談話における話し手と聞き手の相互行為という観点から考えると、話し手と聞き手が持つ情報量は必ずしも均衡であるとは限らない。ゆえに、このような情報量の格差を考慮しなければならないと考え、談話モデルをそのまま採用せず、文脈指示における対立型と融合型という2つのパターンに分ける<sup>4)</sup>。対立型と融合型のコと「这」、対立型と融合型のソと「那」は、それぞれ指示する対象に関する情報が異なる心的領域に登録されると想定され、区別する必要があると考えられる。

対立型は、話し手が自分に属する心的領域と聞き手に属する心的領域を区別し、対立的談話を進行させるパターンである。一方、融合型は、話し手が自分に属する心的領域と聞き手に属する心的領域を区別せず、聞き手と一体感を持って談話を進行させるパターンである。

## 4. 考察

本稿は、日本のバラエティ番組「ホンマでっかTV?!」と、中国の談話番組「対話」の会話文から実例を採集した。また、日本語の指示代名詞「これ」「それ」及び指定指示<sup>5)</sup>の「この+NP (名詞句)」「その+NP」、中国語の指示代名詞「这」と「那」及び指定指示の「这+NP」と「那+NP」の形に限定した。以下、具体的に論じていく。

### 4.1 日本語の文脈指示詞の対立型と融合型

対立型は話し手が自分に属する心的領域と聞き手に属する心的領域を区別し、対立的談話を進行させるパターンである。文脈指示の場合は、話し手が自分の言語文脈領域に属すると捉える情報を「近い」と見なし、コで指し示す。これに対して、話し手は聞き手の言語情報領域に属する情報を「近い」とは見なさず、ソで指し示す。

例えば、例文(1)では、話し手の共有知識領域に予め情報 a1 (ポスト団塊ジュニア世代) が格納され、話し手は「ポスト団塊ジュニア世代という若い人達」などと発話して a1 を言語文脈領域に導入し、それを a2 とする。一般に、話し手が自分の言語文脈領域に登録される情報を「近い」と認識し、「この人達」で指している。

(1) S: いまの若い人達、ポスト団塊ジュニア世代と言われてる人達なんですけど、こ

の人達が消費をしなくなったという<sup>6)</sup>。

その一方、聞き手は一般に、「それ」を用いて話し相手の言語文脈領域に登録されている情報を指し示す。例えば、例文(2)の場合、聞き手は話し手の発話によって、DM-Sの言語文脈領域に導入されたa2(ご飯食べる前に勉強しなさい)を「近い」と見なさず、「それ」で指していると考えられる。

(2) S: まあ、でも言ってしまいますよね、ご飯食べる前に勉強しなさいとか。

H: それをやっても、子供は絶対勉強しません。勉強しているフリをします。

対立型の談話モデルにおけるコ・ソの登録領域を図4で示す。

以上のことは観察1にまとめられる。

観察1 日本語では、話し手が自分の言語文脈領域に属すると捉える情報を「近い」と見なし、対立型のコで指し示す。これに対し、話し手は聞き手の言語情報領域に属する情報を「近い」と見なさず、対立型のソで指し示す。

その一方、融合型では話し手が自分に属する心的領域と聞き手に属する心的領域を区別せず、聞き手と一体感を持って談話を進行させるパターンである。

これまで日本語のコ系の文脈指示の用法に関する研究では、対立型のコ、即ち話し手がコで自分に「近い」と捉える情報を指し示す文脈だけが研究されてきたが(正保1981など)、話し手も聞き手も文脈指示のコを用いて指し示すことができる文脈は注目されてこなかった。そこで、本稿は文脈指示詞コ・ソの融合型という新たな分類を提案する。即ち、話し手と聞き手を区別せず、話し手と聞き手のどちらもコとソを用いて指示対象を指すことができるケースである。この場合は、現場指示の「距離原理」と同様に文脈指示においても、話し

手も聞き手も時間的・空間的に近く、かつ心理的にコミットしている包括的なトピックをコで指すことができる。一方、時空的・心理的に遠くない部分的なトピックを指すときに、一般にソを用いる。

ここでは、部分的なトピックと包括的なトピックという2つの用語について説明する。部分的なトピックとは、「刀」、「男」や「部屋」のように具体的な対象であり、談話に含まれる構成要素を指す。一方、包括的なトピックとは、談話の構成要素ではなく、談話全体をひっくるめる抽象的なトピックである。

具体的には、例文(3)(4)のように、「東京スカイツリーは国債バブルがはじける前兆かもしれない」「こういう理論もそのまま日本に適用できない、その前段階をしっかりとやらなきゃダメなんです」という2つの包括的なトピックを指す場合を見てみよう。

この場合、たとえ話し手が導入した情報でも、聞き手は時間的・空間的に近く、かつ心理的にコミットしているのであれば、自分に属する心的領域と相手に属する心的領域を区別せず、ソではなく、コを持って指すことができるようになる。

(3) S: (前略) 東京スカイツリーは国債バブルがはじける前兆かもしれないです。

H: これはだから、気をつけなきゃならない。

(4) S: (前略) だから、こういう理論もそのまま日本に適用できない、その前段階をしっかりとやらなきゃダメなんですよ。

H: これは難しいなあ。

また、例文(5)では話し手によって導入された「(父親は)男の子との関係が良好だと、ストレス耐性が良くなる」というトピックに、聞き手が深くコミットしている。この時、話し手と聞き手の言語文脈領域が対立せず、一つの共通の言語文脈領域が形成される。「これ」はそこに登録さ

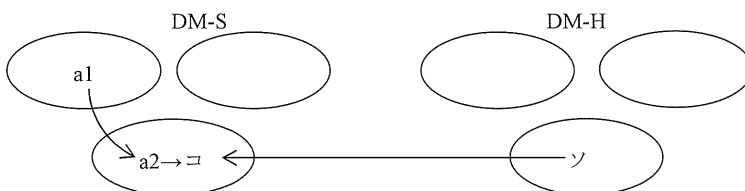


図4 対立型の談話モデルにおけるコ・ソの登録領域

れたトピックを指す。しかし、話し手の「実は話せば長くなるのでやめます」という発話に聞き手は腹を立て（心理的に深く関わっていない）、融合型が発動されず、対立型の「それ」で指し示していると考えることができる。

(5) S: (父親は) 男の子との関係が良好だと、ストレス耐性、我慢強いというのはストレス耐性だって言い換えてもいいと思うんですけども、ストレス耐性が良くなるというデータが2010年の、あの一、国際学会で発表されています。

H: ああ、なるほど、これはどういう理由でですか？

S: これはですね、実は話せば長くなるのでやめます。

H: なんでだよ、それ！

また、例文(6)のように、自ら導入した「鹿児島黒豚とビールのしゃぶしゃぶ鍋」について、話し手は「これ」で指している。しかし、聞き手は「鹿児島黒豚の小さいものはしゃぶしゃぶの時に灰汁が出ない」と発言し、もともとのトピックを発展させ、「近い」と見なし「これ」を持って指す。この時、たとえ最初談話に「鹿児島黒豚とビールのしゃぶしゃぶ鍋」という情報を導入した話し手でも、「鹿児島黒豚の小さいものはしゃぶしゃぶの時に灰汁が出ない」という聞き手によって更新された情報をよく知っておらず、つまり心理的に関わっていない。このため、融合型の談話モデルが発動されず、「それ」で指すのが自然となる。

(6) S: 鹿児島の名物は黒豚です。ビール黒豚しゃぶしゃぶ鍋、これが美味しいですわ。

これ、言いたかったんです。

H: 鹿児島黒豚の小さいものっていうのはですね、しゃぶしゃぶの時に灰汁が出ないです。これがポイントなんです。

S: それは知らなんだ！

融合型のコに対し、時空的・心理的に近くない部分的なトピックはソ系指示詞で指し示す。部分的なトピックとは、例(7)(8)の「サイト」や「スプレー」のような具体的な対象であり、話そのものではなく、登場する人やものなど、いわゆる談話の構成要素を指す。これを指し示す時、話し手も聞き手も、一般に融合型のソを用いる。

(7) S: よく、男の人って一人になると、アダルトサイトを見るんですけど、その無料のアダルトサイトを見ようとしたときに、そこからウイルスが送られて、そのアダルトサイトがフリーズしちゃって、あの一、料金払えという画面が出て(中略)

H: 先生はそれに引っかけたことがあるんですか？

(8) S: 三秒スプレーするだけで、もう理想的な体になれるグッズがある。(中略)それは、自分の肌よりすこしワントーン濃い色を塗って、日焼けしたように見せるスプレーなんですわ。(中略)

H: すみません、要は、それは特殊メークとか、いろいろメークではありますけれども、その上に服着たら汚れますよね。

S: それは二週間ほど持つんです。

ここでは、談話モデルにおける融合型のコとソの登録領域を図示する。

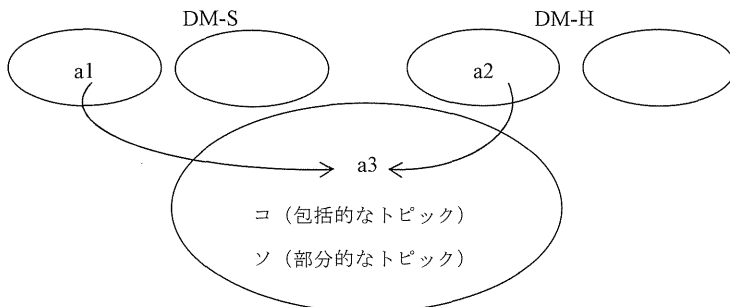


図5 融合型の談話モデルにおけるソの登録領域

以上のことは観察2にまとめることができる。

観察2 日本語では、話し手も聞き手も時間的・空間的に近く、かつ心理的にコミットしている包括的なトピックをコで指すことができる。一方、時空的・心理的に遠くない部分的なトピックをソで指し示す。

#### 4.2 中国語の文脈指示詞の対立型と融合型

まず、対立型の「这」「那」について論じる。

中国語の文脈指示の対立型は、日本語の文脈指示の用法と同様に、話し手が自分の言語文脈領域に属すると捉える情報を「近い」と見なし、対立型の「这」で指し示す。これに対し、話し手は聞き手の言語情報領域に属する情報を「近い」とは見なさない場合は、対立型の「那」で指し示す(例文(9))。

(9) S: 我在五年前听过您讲的课, 给我印象非常深的是关于不竞争的理论, (中略) 这是和别人不竞争, 开发和别人不竞争的事业, 我们非常欣赏. 但是我们也碰到问题, 同样按照这样的理论, 有的产品我们做成功了, 有的产品我们做失败了. (五年前のご講演を拝聴したことがあって、特に印象に残ったのは、競争しないという理論でした。(中略) これは人と競争しない, 人と競争しない事業を始めるということなので, 我々はとても感服しています. しかし, 同じ理論に基づいて製品を開発しているんですが, ある製品は成功したけど, ある製品は失敗してしまったのです.)

H: 那些产品都是非常独特的吗? (その製品ってすべてユニークなものですか?)

例文(9)では、話し手は「不競争的理论(競争しないという理論)」などと発話して、自らの共有知識領域に格納された情報 a1「不競争的理论」を言語文脈領域に導入し、それを a2 する。a2 は自分の言語文脈領域に属する情報のため、それを「近い」と捉え、「这」で指し示す。聞き手は話し相手の言語文脈領域に登録された情報を「近い」と見なさず、「那」で指し示す(図6を参照する)。

また、中国語では、聞き手は話し相手の言語文脈領域に登録されている情報に否定的な場合も、この情報を「近い」と見なさないため、「这」よりも対立型の「那」はより多く用いられることが観察される。この時、例(10)(11)のように、特に「不」「没」など否定を表す副詞を伴うケースが多く観察された。

(10) S: 您也是两家公司的独立董事, 身在其中的感受和您之前站在外面的感觉是不是一样的? (あなたは二つの会社の取締役を別々に務めていらっしゃると思いますが、その中で感じたことと, これまで会社の外で感じたこととは, 同じですか?)

H: 那不一样, 很不一样. (それは違いますが, ずいぶん違います.)

(11) S: 不能出门了, 可能会觉得, 是不是很憋得慌? (出かけることができなくなったので, 退屈と思わないのか?)

H: 那倒没有. (それはないですね.)

以上のことは、観察3にまとめられる。

観察3 話し手が自分の言語文脈領域に属すると捉える情報を「近い」と見なし、対立型の「这」で指し示す。これに対し、話し手は聞き手の言語情報領域に属する情報を「近い」と見なさ

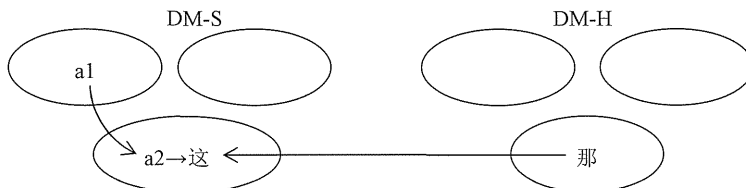


図6 対立型の談話モデルにおける「这」「那」の登録領域

ない場合は、対立型の「那」で指し示す。

次に、融合型の「这」「那」について考察していく。日本語の融合型の「这」は「時間的・空間的に近く、且つ心理的にコミットしている包括的なトピック」という発動条件を前提とするのに対し、中国語の融合型の「这」はこのような発動条件を前提としない。

一般に、中国語では、話し手は自分に属する言語文脈領域と、聞き手に属する言語文脈領域を区別せず、聞き手と一体感を持って談話を進行させるのである。話し手と聞き手の言語文脈領域が対立せず、一つの共通の言語文脈領域が形成される。このため、両者のどちらが導入した指示対象であるにも関わらず、話し手も聞き手も融合型の「这」を用いてその対象を指し示すことができる。

例文(12)では、話し手によって、「中国的几大儿童网站联盟，在自己的网上都放了安全规则（中国では、いくつかの子供のウェブサイト連盟のサイト上に安全規則が掲載されている）」という情報が共通の言語文脈領域に導入される。この時、一般的には、話し手も聞き手も融合型の「这」を持って、そこに登録された包括的なトピックを指す。

(12) S: 中国的几大儿童网站联盟，在自己的网上都放了安全规则，这是刚开始。我觉得这是我特别想说的。（中国ではいくつかの子供のウェブサイト連盟は、自らのサイト上に安全規則が掲載されています。これが始まりです。これが言いたかったんです。）

H: 这应该成为一种法规。（これは、一種の法律として定められるべきですね。）

一方、部分的なトピックの場合は、融合型の「那」が用いられやすいことが分かる。例えば、例文(13)では、話し手が共通の言語文脈領域に導入した「为了薪水来的人和为了发展空间来的人（給料目当てに来た人と発展空間目当てに来た人）」を、話し手も聞き手も融合型の「那」で指し示すことができる。

(13) S: 两个人在跳槽的时候根本的出发点是不同的，一个是为了您这边薪水来的，一个是为了您这边的发展空间来的。您

会不会觉得说那个看重薪水的人我就不看好他？而那个看重发展空间的人我就看好他。（二人は転職の際の根本的な出発点が異なっていると思います、一人は給料目当てに来てくれて、もう一人は発展空間<sup>7)</sup>目当てに来てくれたのです。もしかして、あなたはその給料目当てに来た人には期待せず、その発展空間目当てに来た人に期待するのですか？)

H: 我觉得是，那个看重发展空间的人，他没有说出他的心里话。（その発展空間目当てに来た人は、彼は自分の本音を言っていないと思います。）

また、融合型の「这」「那」がともに用いられる文脈では、「照片（写真）」のような部分的なトピックを指すとき、「那」は用いやすいが、「经验（経験）」や「感觉（感じ）」のような包括的なトピックを指す場合、「这」が用いられやすいことが分かる（例(14)）。

(14) S: 因为在过去在窄带拨号上网的时候，你想下传一张照片，你的心情都没有了，然后那张照片才下来，对吧。你有这种经验吗？真的，本来看着想激动，但是到那张照片下来已经不激动了，就是这种感觉。（昔、ナローバンドダイヤルアップ接続の時、一枚の写真をダウンロードしようとしたら、（ずっと待っていて）気が沈んでしまって、ようやくその写真をダウンロードできたってことはあるでしょう？あなたもこんな経験がありましたよね？本当よ、もともと興奮していたのに、その写真をダウンロードしてから、もう興奮できなくなりました。こんな感じです。）

以上の融合型の談話モデルにおける「这」「那」の登録領域を図7で表示する。

以上のことは観察4にまとめられる。

観察4 中国語では、話し手は自分に属する言語文脈領域と、聞き手に属する言語文脈領域を区別せず、聞き手と一体感を持って談話を進行させるのは一般的である。また、融合型の「这」「那」

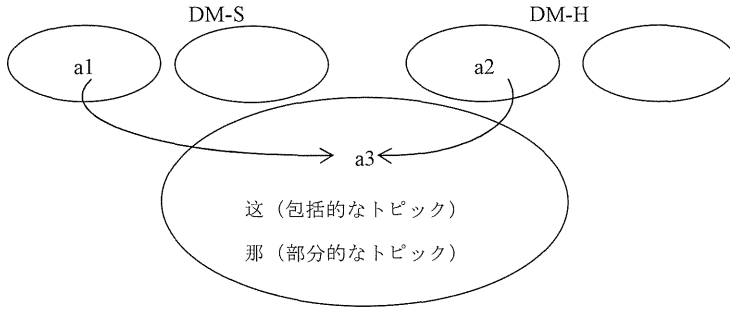


図7 融合型の談話モデルにおける「这」「那」の登録領域

がともに用いられる文脈においては、話し手と聞き手は共通の言語文脈領域に登録される包括的なトピックを「这」で指し、部分的なトピックを「那」で指す傾向がある。

## 5. おわりに

以上の考察から、会話の場合、日本語では対立型が基本パターンで無標であり、中国語では融合型が基本パターンで無標であることが判明した。具体的には、会話文における日中の文脈指示的用法の共通点と相違点を以下のように示す。

まず、共通点として挙げられるのは、談話モデルの対立型と融合型の2つのパターンは、日本語と中国語の文脈指示における選択問題を解決するには、ともに有効であることが確認された。対立型の場合は、話し手は自らの言語文脈領域に登録される対象を「近い」と見なし、コと「这」で指す。聞き手の言語情報領域に属する情報を「近い」と見なさず、ソと「那」で指し示す。一方、融合型においては、話し手と聞き手は、共通の言語文脈領域に登録される包括的なトピックをコと「这」で指し、部分的なトピックをソと「那」で指すという傾向も確認された。

一方、相違点として挙げられるのは以下のことである。日本語では、一般に対立型の談話モデルで談話を展開する。しかし、話し手と聞き手にとって、時間的・空間的に近く、且つ心理的にコミットしている包括的なトピックが出現すると、対立型の談話モデルが融合型に移行し、話し手も聞き手もこの包括的なトピックをコで指すことができるようになる。これに対し、中国語の融合型

の「这」はこのような発動条件を前提としない。中国語では、話し手は自分に属する言語文脈領域と、聞き手に属する言語文脈領域を区別せず、聞き手と一体感を持って談話を進行させるのは一般的である。このため、中国語では「那」に比べ、「这」のほうがより多く用いられるという傾向がある。しかし、話し手はトピックをよく知らない、または否定している場合は、融合型の談話モデルが対立型に移行する。この場合にのみ、融合型の「这」が用いられず、対立型の「那」で指し示すこととなる。

## 付記

本稿は、京都大学に提出された筆者の修士論文の第5章が加筆・修正されたものである。また、平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金「談話における日本語と中国語の指示詞の研究」(課題番号:11J00353)による研究成果の一部でもある。草案段階から終始丁寧なご指導を賜った指導教員の東郷雄二先生に心より感謝を申し上げたい。なお、本稿の不備、誤りなどはすべて筆者の責任である。

## 注

- 1) 庵(2007)によると、この3タイプの文脈とは「先行詞を言い換えた場合」、「先行文脈や文連続を指示し、それらに名前を付ける場合」、「先行詞と定情報名詞句との距離が大きい場合」である。
- 2) 劉(2011a)の調査では、ニュースにおいてはコが全体の92.1%を占める。
- 3) 劉(2010)は文脈指示の「那」で指す指示対象が談話モデルの言語文脈領域に登録され、観念指示の「那」で指す指示対象が共有知識領域に登録されると説明している。談話モデルについては、



第3章で詳しく論じる。

- 4) ここでは、本稿と正保(1981)による文脈指示の融合型との区別を述べておきたい。文脈指示の対立型については、正保によると、話し手が自分のなわばりにあるか(コ)、聞き手のなわばり(ソ)にあるかと認定した人・モノを対立型のコ・ソで指す。このような現場指示的用法の人称原理に基づいた分け方に対し、本稿での対立型は、現場指示的用法の距離原理に基づいている。つまり、話し手が自分のなわばりに属すると見なす情報をコで指す。自分のなわばりに属さないと見なす情報をソを指す。
- 一方、文脈指示の融合型については、正保はコ・ソ・アの三項対立を挙げている。これに対し、本稿は東郷(2000)の主張に支持し、ア系指示詞を文脈指示詞と見なさない。よって、本稿は距離原理に基づいて融合型のコ・ソという二項対立を提示する。また、正保(1981)を含む従来の研究では、話し手も聞き手もコを用いて指し示すことができる文脈は注目されてこなかったため、本稿ではこのような文脈で用いられるコを融合型のコと呼ぶ。さらに、正保は融合型の発動条件について「われわれ意識の成立する状況にいるという一方的な仮定に基づいて文章を書いている」と述べているが、融合型の発動条件と、コ・ソの使い分けについて説明していない。このため、本稿の4節では、文章のみならず、会話文における融合型のコ・ソの発動条件について詳しく論じる。
- 5) 庵(2007)によると、指定指示というのは、「この+NP」「その+NP」全体で先行詞と照応する用法である。例：昨日近所ですしを食べた。この/そのすしはうまかった。
- 6) 本稿では先行文脈を点線で示し、照応詞を実線で示す。
- 7) 中国語では、「自分が成長することの出来る職場」は「発展空間」と呼ばれる。

#### 参考文献

- Brown, G. and G. Yule (1983) *Discourse Analysis*, Cambridge University Press
- Fauconnier, G. (1994) *Mental Spaces*, Cambridge University Press
- 庵 功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』, くろしお出版
- 金水 敏 田窪行則 (1990) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」, 金水・田窪(編), 『指示詞』, ひつじ書房
- 胡 俊 (2006) 「日本語と中国語の指示詞についての対照研究——文脈指示の場合」, 『地域政策科学研究』, 第3号, 鹿児島大学大学院人文社会科学研究所
- 正保 勇 (1981) 「日本語の『コソア』の体系」, 『日本語の指示詞(日本語教育指導参考書8)』, 国立国語研究所
- 朱 徳熙 (1982) 『语法讲义』, 商务印书馆
- 沈 家煊 (1999) 『不对称和标记论』, 江西教育出版社
- 田窪行則・金水 敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」, 『認知科学』, 3-3, 日本認知科学学会
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」, 『京都大学総合人間学部紀要』, 第7巻, 京都大学総合人間学部
- 東郷雄二 (2002) 「不定名詞句の指示と談話モデル」, 『談話処理における照応過程の研究』, 科学研究費成果報告書
- 長田久男 (1984) 「持ち込み詞の連文的職能」, 『国語連文論』, 和泉書院
- 浜田 秀 (2001) 「物語の四層構造」, 『認知科学』, 8-4, 日本認知科学会
- 杨 玉玲 (2006) 「单个“这”和“那”篇章不对称研究」, 『世界汉语教学』, 6
- 杨 玉玲 (2011) 「可及性理论及“这”, “那”篇章不对称研究」, 『河南社会科学』, 19-2
- 劉 巖 (2010) 「『那』の文脈指示と観念指示——談話モデル理論による分析」, 『日本語用論学会第12回大会発表論文集』, 日本語用論学会
- 劉 巖 (2011a) 「日本語の文脈指示詞『この』の対立型と融合型——談話モデル理論による分析をもとに」, 『KLS』, 第31号, 関西言語学会
- 劉 巖 (2011b) 「日本語の文脈指示詞『この』と『その』について——談話モデル理論による分析をもとに」, 修士論文, 京都大学
- 劉 巖 (2012) 「物語における日本語と中国語の文脈指示詞の対照研究——談話構造の観点から」, 『日中言語対照論集』, 第14号, 白帝社
- 吕 叔湘 (1980) 『现代汉语八百词』, 商务印书馆
- 吕 叔湘 (1985) 『近代汉语指代词』, 学林出版社

## Opposition Mode and Fusion Mode of Japanese and Chinese Anaphoric Demonstratives

—— Based on Discourse Model Theory ——

LIU Biao

Graduate School of Human and Environmental Studies/Japan Society for the Promotion of Science  
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan/8 Ichibancho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8472

**Summary** The purpose of the paper is to clarify the selective principles of Japanese and Chinese anaphoric demonstratives, based on opposition mode and fusion mode of Discourse Model. As a result, in opposition mode, the speaker/hearer uses *ko* and *zhe* to refer to the mental representation which belongs to the linguistic context of his/her own Discourse Model, and uses *so* and *na* to indicate the one in the linguistic context of his/her interlocutor's Discourse Model; In fusion mode, the speaker and the hearer use *ko* and *zhe* to refer to the inclusive topic, use *so* and *na* to indicate the partial topic of the joint linguistic context of Discourse Model.